

◆**単元名**：第6章 国際社会に生きる私たち 2 国際社会が抱える課題と私たち

「① 終わらない地域紛争」(教科書 pp.208-209)

◆**本時の目標**：

地域紛争やテロリズムなどにより人々が国外へ逃れる背景と、難民生活にどのような困難が伴うかを理解し、受け入れ国でも難民の人々が尊厳を守りながら地元住民との対立を乗り越え、共生していくための手立てに関する考察を通じて、地域紛争がもたらす難民問題への理解を深める。

《**本時の展開例**》

	学習活動	留意点	デジタル教科書・教材
導入 (5分)	【問】東京オリンピックの開会式で難民選手団が最初に入場したが、難民とはどのような人々をいうのだろう。また、難民選手団の出身国はどこが多いだろう。	・難民選手団の中で、特にシリアやアフガニスタンからの選手が多いことに着目し、デジタル教科書の地図と関連づける。	・入場行進の写真と選手団の名前、出身国、デジタル教科書〈p.209・ 5 「難民の出身国・地域別人数」〉を順次、スクリーンに映し出す。
展開 (35分)	<p>●冷戦後も多くの地域紛争が発生し、それに伴って多くの難民が発生していることを理解する。</p> <p>●難民保護のための国際的な枠組み(難民の地位に関する条約/UNHCR など)を確認する。</p> <p>【問】難民キャンプにはどのような課題があるか、班ごとに調査項目を二つ選び、調査しよう。 《調査項目例(八つ)》</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>食料/衛生/水/医療/教育/子ども /女性/地元住民との関係 など</p> </div> <p>●共同編集ができるアプリ等を用いて、調べた内容をまとめ、班員同士で課題を共有する。</p>	<p>・歴史の学習と関連づけて、歴史的な経緯が現在にも影響していることに着目させたい。</p> <p>・教科書p.70・3「難民の地位に関する条約」(1951年)をふり返り、各国によるその適用を監督する任務が、UNHCRにあることを確認する。</p> <p>・八つの調査項目例から、難民は、出身国での武力紛争や人権侵害の危険から逃れた後も、生活基盤や社会的なインフラが不十分な場所で暮らすことになるため、さまざまな困難に直面することに気づかせたい。</p> <p>・難民の増加と長期化は、受け入れ国にも経済的な負担となり、地元住民との対立や排斥運動につながるケースがあることにも着目させたい。</p>	<p>・デジタル教科書〈p.208・1「内戦による空爆を受けて逃げる人々」、4「アフリカの主な地域紛争」〉を順次、スクリーンに映し出す。</p> <p>・配布端末等を活用し、UNHCR や JICA 等のサイトから、難民キャンプが抱える課題について調べる。</p> <p>・デジタル教科書〈p.209・6「世界の難民数の推移」〉をスクリーンに映し出す。</p> <p>・各班で配布端末等を活用して、班で調べた内容をまとめる。</p> <p>* Google や Microsoft などのアプリ等を、適宜ご活用・ご併用ください。</p>
まとめ (10分)	【問】受け入れ国で難民の尊厳を守りながら、地元住民と共生していくためには、どのような手立てが必要だろうか。	・難民と受け入れ国、支援者の立場の違いを考慮しながら、多面的・多角的に考察させたい。	・班ごとに端末を活用して意見交換を行い、班で考察した内容をまとめる。

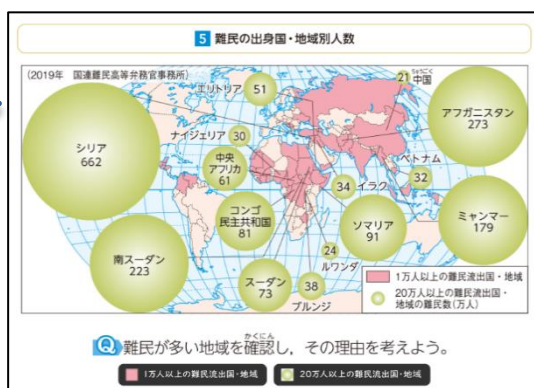
◆指導にあたって：

- 2021年に「東京2020オリンピック競技大会」が日本で開催された際、開会式で難民選手団が最初に入場して注目を集めた。その一方で、西アジアではシリア内戦に収束の兆しが見られず、アフガニスタンでは政治情勢の変化によって、多くの難民が発生する事態となっている。授業の導入では、最新の国際情勢の状況や変化を紹介しながら、生徒の関心を高めていきたい。
- 本時の展開では、調べ学習によって難民キャンプで暮らす人々の現状を理解するとともに、難民発生国の隣国であるために、数百万人単位の難民を受け入れるトルコやレバノン、ウガンダなどの国々の負担にも着目させたい。長期間の難民の受け入れを行う国では、地元住民との対立や社会不安が広がり、ドイツでも百万人以上の難民を受け入れてきた反動から排斥運動が発生した。難民発生の根本的な解決策が見いだせない中、長期化する難民の受け入れと、地元住民との共生をどうしたら図れるのか。国際社会や地域社会の視点から、紛争や難民の問題について多面的・多角的に考察させたい。

◆デジタル教科書活用のねらい：

- デジタル教科書 p. 209 - [5] 「難民の出身国・地域別人数」と「東京2020オリンピック競技大会」に出場した「難民選手団」の出身国の情報を関連づける事で、生徒がふれたことのある情報をもとに理解を深めていくことをねらいとした。難民選手団の出身国はIOCのサイトから得ることができ、シリアやアフガニスタン、南スーダンの出身が多い。この情報と、デジタル教科書の主題図や写真と関連づけることで、難民となった人々の背景に迫りながら授業を展開していきたい。

「オリンピックの難民選手団の出身国と、地図中の情報を比較してみよう」



◆授業でさらに活用するポイント：

- デジタル教科書〈p.209 - [6] 「世界の難民数の推移」〉から、難民の数が急激に増加していることがわかる。本時の展開では、難民キャンプの現状について理解を深めるために、教科書のグラフとUNHCRやJICAのサイトの情報を関連づけて考察させようと試みた。UNHCRのサイトには難民の現状について伝える動画もあるため、活用することでより理解を深めることができる。UNHCRによれば、2020年の難民数は約2500万人、国内避難民や庇護希望者等を加えると約8240万人に達する。世界の約78億人のうち、8000万人以上の人々が迫害やその恐れによって故郷を追われている現状を理解させ、深刻さに迫りたい。



↑ UNHCR 日本サイト「数字で見る難民情勢」
(https://www.unhcr.org/jp/global_trends_2020) より